

あの日の長根リンク

水都・八戸の半世紀

㊤ アジア大会

2003年2月2日。青森県で「冬季アジア大会」が開幕した。スピードスケート競技が行われた八戸市の長根リンクには、連日市民らが詰め掛け、トップアスリートの滑りに声援を送った。幾重にも人垣ができて熱狂の渦に包まれたリンクを、関係者は「圧巻の光景だった」と回顧。市民に根づく「水都の熱」を改めて示す機会となった。

「すごい盛り上がりで、入場するにも大行列。電柱に登って見ている人もいた」。現在、八戸学院大スケート部監督で、現役時代に富士通に所属した船場(旧姓・成田)亜希さん(46)は、表彰式担当として大会に携わった。富士通の先輩である岡崎朋美さん、親交のあった清水宏保さんら多くの選手がレース後、「こんなに(観客が)集まることはない」と口をそろえたことを振り返り、「スケートが好きな街だと実感した」と表情を緩める。

スピードに驚き

岡崎さん、清水さんが登場した大会初日、長根リンクには7千人以上が来場。その中、

新記録に興奮の渦

スケート熱示す観客7000人

ひととき大歓声を浴びたのが清水さんだった。男子5000分の1回目で華麗なロケットスタートを披露すると、勢いそのままに35秒56の大会新記録をたたき出した。

当時高校生でレースを見ていた松尾和明さん(33)「吉田産業」は「長根リンクでこんなタイムが出るのか。トップ選手のスピード感に驚いた」。場内の通告員を務めた菅宏さん(54)「新郷村立野沢中学校長

は「実力があると知っていたが、ここまでかとびっくりした。タイムをアナウンスするのに力が入った」と話す。整氷を担当した紫葉博さん(56)「エスプロモ」も清水さんの勇姿に感銘を受けた。大会1カ月前から手塩にかけて育てたリンクで、前代未聞の大記録。開幕直前まで雪や雨の対応に追われる苦労もあったが、「屋外でもこんな記録が出るのかと驚き、その

リンクを作れたことが励みになった」と胸を張る。現在も長根リンクの整氷作業を手掛ける紫葉さんにとつて、あの時の感動が自らの支えとなっている。

関係者の励みに

00年代、世の中には娯楽が増え、八戸でもスケートリンクへ通うことが「非日常」へと変わりつつあった時期。そんな中、国際大会が開かれる

長根の「晴れ舞台」を見に来た老若男女が大勢いたことに、関係者は励まされたという。大会運営に携わった県スケート連盟顧問の橋本恭一さん(81)もその一人で、「八戸人は根っからのスケート好きなんだ」とさらに水都への思いを深めた。

今秋に供用開始となる市立屋内スケート場は21年に行われる「世界ジュニアスピードスケート選手権」の会場に内定しており、アジア大会以来の国際大会の開催となる。

同連盟の田名部和彦会長(66)は「アジア大会同様の感動があるだろう。子どもたちにトップレベルの滑りを見てほしい」と強調。あの熱狂が再び味わえる日が近づいている。

【訂正】27日付け20頁、「あの日の長根リンク」㊤アジア大会」の記事の中で、船場亜希さん、岡崎朋美さんの所属先は富士急行でした。おわびして訂正します。